

に何故提婆達多のような大怨敵が存在するのか、という章提希の問難に対して、『観経』では釈尊の回答が示されておらず、この問難は『法華経』提婆品ではじめて解決されるという。つまり、『法華経』の説く三世を一貫した時間論の中では、善悪の対立関係が相対化され、この点に聖人は提婆達多救済の論理性を見出されたのである。『開目抄』のもう一方の文（五九八〜九頁）では、聖人の法華経行者意識と関わり、歴史的具体的場面に即して「善」と「悪」とが同時的存在であることを、よりダイナミックに把握されている。

このように見てくるとき、釈尊と提婆達多に象徴される宗教的善悪の対立関係は、『法華経』それ自体が志向するところであることに気づく。この問題は、実は既に天台教学で着目されており、善悪相資説あるいは敵対種開会という相即の論理がそれである。

ただし聖人はそれらの論理に立脚しつつも、いわゆる思弁的な抽象論にとどまっではない。このことは『種御振舞御書』（九七一〜二頁）の中で明白に示されており、聖人は宗教的「善」と「悪」との対立関係を止揚する理論を、自己の法華経行者としての宗教的実践の中に求められ、常に歴史的具体性をもった形でそれらを論

理化されていたと考えられる。つまり聖人は、正しい仏法を行ずる者には必然的に敵対者が興起することを仏の「未来記」として受けとめられたのであり、そのところに聖人が「提婆達多」の事蹟を引用される本質的な契機が存在すると言えよう。

かくして日蓮聖人の「提婆達多」解釈の問題は、宗教的善悪論との関わりの中で、さらに検討を進めなければならぬ。

〔註〕

拙稿「日蓮聖人の提婆達多観——『逆罪』研究の視点から」（立正大学大学院『仏教学論集』第十七号所収）、同「日蓮聖人遺文に見られる『提婆達多』について——悪知識としての一側面」（『日蓮教学研究紀要』第十二号所収）

## 下種に関する一考察

立正大学大学院 平 島 盛 雄

日蓮聖人の教学においては、法華経に対する信受のあり方に収約して成仏が論じられることから、法華経不信

の衆生が如何にして法華經の信心を獲得しうるのか、その理論的根拠を明確にすることが根本的な課題であったと考へる。日蓮聖人の下種論を視点とするとき、この問題意識は次の如き仮説を提示することができる。すなわち、日蓮聖人の法華色説という実践を支えたものは、かりに法華經不信の衆生であつても、法華經を聞法すれば、それによつてやがては法華經の信心を植へることができ、という理念にあつたのではないか。この仮説は要約すると、日蓮聖人が天台教學のいわゆる聞法下種論を受容されたことを前提に、下される仏種を法華經の信心と考へるものである。小稿は、この仮説の有効性についての検討を試みるものである。

まず問題となる聞法下種の論理構造であるが、このことについては以前に発表する機会を得た<sup>1)</sup>ので、今はその要点を簡条書きにしておきたい。

・聞法下種における「聞法」とは、仏性常住の理を聞知することである。尚、この聞知は、領解とか信樂とは明瞭に区別されているようである。

・法華經を聞法することによつて衆生に下される仏種とは、了因、縁因の二仏性であると考えられる。ちなみに、三因仏性の性具を説くことは天台教學の大前提で

あるが、しかし、それは可能性としての理論であつて具体的現実におけるそれではない。聞法下種に説く縁了仏性とは、現実における智慧の発揚であり具体的実践であると言へよう。

・法華經（仏種）という教法から衆生の縁了仏性の顯現（仏種）へ、という聞法を媒介とした仏種の移行は、法華經の有つ経力、功能等の概念で理解されている。それは、如来の眞実を顯説した法華經の絶対性を根拠としており、『文句記』は「教能生智」と表現している。尚、智慧の発揚から具体的実践への昇華は道理であると考へる。

以上に概観した聞法下種の論理構造を踏まえ、次に下種の仏種を法華經の信心とする仮説の有効性について検討する。そこで、教學史を一瞥すると、慶林坊日隆の著述の中に、「此信心其実体教也。或從知識或從經卷生信心。隨知識經卷云教也。故信必自教生。信是下種実体教即可下種実体」『四帖抄』三六頁）という一段を見ることができる。これは、聞法下種の論理構造である「教能生智」という考へを、日蓮聖人のいわゆる以信代慧の立場から解釈したものと考へられる。そしてこのこ

とは、方法論として妥当であると思われるのである。なぜなら、日蓮聖人は『四信五品抄』に「信は慧の因」(一一九六頁)であるとして、信と智慧とを全く別個の概念とはせず、智慧が生ずるには必ず信が付随していることを指摘しているからである。また『開目抄』に示された「法華經の信心了因の子」(六〇三頁)という表現からも同様のことが理解できるのである。このようなことから、日蓮義においては、法華經を聞法することによって下される仏種は法華經の信心である、とする日隆の解釈は妥当性を得たものであると考えられる。

以上の考察から、日蓮聖人は、謗法の衆生にも強いて法華經を説き続けるということに、凡夫成仏の確信を懷かれていたと考えられる。なぜなら、聞法下種という日蓮聖人の死身弘法の実践を支えたであろう一つの理念を、そこに観取しうるからである。

〔註〕

(1) 立正大学『大学院論集』第一八号所収

## 近代日蓮主義研究(二)

——本多日生の布教活動について——

浜 島 典 彦

本多日生は近代日蓮主義の流れのなかで、田中智学と比肩される一方の旗手であり、後世に与えた影響も大きい。しばしば本多は国策に沿った宗教協力者として評価されているが、ここでは彼が組織した種々の団体の動向役割をさぐり、統一閥をめぐる活動について考え、評価を問うてみたい。

明治二九年一月一三日、妙満寺派の結束を固め、他宗僧徒との対決、仏教界統一を目的とした統一団を結成した。統一団の規則は三条目から成り、雑誌の発刊、講演会の開催、各派共有の布教会堂建設を目指す等を定めている。

その一方、本多は四箇格言を訴え、他宗との法論も展開していく。この折伏布教で、小笠原長生・佐藤鉄太郎等の著名人を獲得するが、そのなかで妙満寺派の統一団ということに限界を感じていく。そこでセクト意識を払